# カゲロウデイズ　小説にしてみた

くろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
カゲロウデイズ　小説にしてみた

【Ｎコード】
Ｎ６８２９Ｚ

【作者名】
くろ

【あらすじ】
主人公　悠斗　（ゆうと）
ヒロイン　礼奈　（れいな）
これ以上の登場人物は出ないと思います・・・
あ。でるときもあるかも←

## 夏（前書き）

初めまして。くろと申します。連載小説ははじめて挑戦します。
今回書くのは私の大好きなボカロ曲「カゲロウデイズ」と「ヘッドフォンアクター」
という歌を小説にしたものです。
駄文、乱文でも全然かまわないという偉大なお方はどうぞ最後までゆっくりしていってください。
※批判、中傷的なコメントは控えてください。
　アドバイスをくれるなら尻尾振って喜びますw

# 夏

８月１５日午後１２時半頃
病気になりそうなほど天気がいい
日差しが肌に突き刺さって痛い。今日はどうやら最高気温を更新するようだ
悠斗は公園のブランコに座ってちらっと携帯を見た

「ねぇ悠斗？話し聞いてる？」

「お、わりぃ。聞いてなかった」

悠斗の隣のブランコに座っているのは彼女の礼奈
２人は去年の秋から付き合っている。
元々仲がよかった２人がさらに距離を縮めるのにはそう時間はかからなかった
悠斗も礼奈もこうなることを心のどこかで望んでいたのだろう
付き合い始めて半年経つ今日。
どこかに行くわけでもなく、いつもの公園でただ２人で駄弁っていた

「にしても今日はホントに暑いな・・・」

悠斗は着ていた半そでを捲り上げてで自分をあおいだ。
生ぬるい風が逆に気持ち悪い
しかし、悠斗はそんな夏が大好きだった。夏休みもあるし、いろんなところに遊びにいける。
宿題があるのが最大の難点だが、それさえ乗り越えてしまえば楽しいことしかない

それに礼奈との想い出を増やす絶好のチャンスだ
そんなことを考えていると自然と頬が緩み口元がにやけてしまった

「悠斗ったら何にやけてるの？」

「いや、なんでもねぇよ」

「どーせ悠斗のことだから夏休み早くこいとか、どこかに遊びに行きたいって思ってんでしょ？
顔に書いてあるよ」

的を射たことを言われ、悠斗はつい苦笑いになった

「ばれたか」

「当たり前でしょ」

礼奈は得意げに笑った
礼奈の笑顔は綺麗だ。筋の通っている鼻や、大きな瞳。そして小柄で色白ときたものだ。
かなりの美人になるだろうと近所のおばさんたちは礼奈を見るたびに言った。

## 夏（後書き）

うーむ・・・最初っからgdgdで申し訳ないですorz

## もう1人

ふと足元を見ると黒猫が礼奈の足元に擦り寄ってきているのが見えた

「猫！かわいい！！」

猫が大好きな礼奈はすぐさま抱き上げて膝におく。
礼奈はかわいいものには目がなかった。
キラキラしたものやあまり派手なものは好まないが
程よい可愛さのものには目がない
猫もゴロゴロのどを鳴らしながら礼奈の膝の上で眠ろうとしている
悠斗はそれを嫌悪の目で見つめていた
猫は好かないのだ。猫か犬かとき枯れたすぐに犬と答える
小さいとき大きな猫に追いかけられた記憶があるのだ
いまだにトラウマでよく礼奈にバカにされた。

「でもまぁ、夏は嫌いかな」

礼奈は猫をなでながらふてぶてしく呟いた

「え？何で？」

「のどが無性に渇くから！」

礼奈は子供っぽく笑いながら自動販売機を指差した
ずっとのどが渇いていたのだろう

「仕方ねぇなぁ・・・何がいい？」

「一緒に行く！」

しぶしぶ立ち上がった悠斗に対して礼奈は猫を抱きかかえたまま嬉しそうに立ち上がった。

「猫置いてけよ」

悠斗は少しビクビクしながら猫を指差した

「いいじゃん。かわいいんだからさ。あっ」

猫が勢いよく礼奈の腕の中から飛び出した

「まってよー」

礼奈も跡を追う。悠斗はただその光景を眺めていた

猫は道路の方に逃げた。礼奈も跡を追う

おい、もう道路だぞ??！

「礼奈！！」

叫んだときにはもう遅かった。赤に変わった信号機

ドンという鈍い音が町に響いた。トラックが一人の少女を引きずって泣き叫ぶ

生で見る血飛沫の色はかなり赤くて、リアルで・・・・

血の匂いが鼻を突き刺す。気持ち悪い・・・・

「あ・・・れ・・いな・・・嘘だよな・・・・？」

悠斗は口をおさえてがたがたと振るえていた

「クスクスッ・・・嘘だと思う？」

「え？」

ふと横を見ると俺と同じ顔をしている男がいる。
嘘だ。礼奈が死ぬなんて俺は信じない。

「嘘じゃないぞ」

蝉の音がうるさい夏の出来事。
血の匂いで気持ち悪くなった悠斗の意識が朦朧としてきた
もう前が真っ暗・・・
それなのになぜかもう一人の自分が笑っているのははっきりと分かった

## 夢（前書き）

ホントに文がめちゃくちゃで・・・ごめんなさいｏｒｚ

## 夢

ハッと気付いて目を覚ますといつもの見なれた天井があった
なんだ・・・やっぱり夢か・・・
内心ほっとした悠斗は大きな伸びをして、手元にあった携帯を開いた
８月１４日の午前１２時過ぎくらいをさそうとしている
テレビをつけるとお昼のニュースが始まっていた

「８月１４日、お昼のニュースをお伝えいたします」

テレビ画面に映った若い女性アナウンサーの透き通った声が耳に滑り込んでくる
とても聞きやすい

「やべっ・・・公園行かなきゃ・・・」

悠斗は外に飛び出して公園に向かった
暑い。何もしてなくても汗が出てくる
それなのに走っているから尚更汗がでてくる
Ｔシャツが背中に張り付いて気持ち悪い
さらにこんな暑い日にはいつも煩く鳴いている蝉も今日はかなり煩いまるで壊れたラジオのようだ
悠斗はなんとなく、この蝉のどこかで聞いたような気がして思わず足を止めてしまった。

「まいっか！」

悠斗は再び足を動かした。たいして気にもとめず

「礼奈」

「あ、悠斗！」

礼奈は公園のブランコに座っていた。その膝の上には黒猫。

「うわ・・・」

悠斗は思わずあとずさってしまった。
猫は嫌いだ。

「なによー。失礼じゃない」

礼奈はふくれっつらで悠斗を睨んだ

「そうかー？そもそもこんなふさふさな毛とか暑いだろ？」

「いいの！こんなに暑い夏が悪い」

「夏のせいにするなよ」

礼なの口元が緩み笑顔になる。悠斗もつられて笑顔になったが
すぐに強張った表情に戻った
ついさっき見た夢を思い出したのだ
確か夢でもこの公園に礼奈と2人でいて、その黒猫もいた
それでその猫が礼奈の腕から逃げ出して、礼奈は跡を追いかけた
それで・・・道路に飛び込んで・・・
悠斗の額の汗はいつしか冷や汗に変わっていた

「悠斗？なんか顔色悪いよ？」

礼奈は心配そうに悠斗の顔を覗き込んだ

「あっ、おぅ・・・平気」

無理矢理笑顔を作ってしまった。やはりその表情は硬い

礼奈は不服そうに頷いた

「ふぅん・・・ならいいや。あっ」

黒猫がまたしても礼奈の膝の上から飛び降りた。道路に向かっている

もしまた轢かれたら・・・

そう思うと悠斗は反射的に礼奈の腕を掴んだ

「悠斗？」

礼奈は驚いたのか素っ頓狂な声をあげた

「もうさ・・・今日は帰ろう」

悠斗はのどの奥からかすれた声を出した

蝉の声にかき消されそうなほど小さな声

## 夢（後書き）

中途半端で大変申し訳ない！！！
頑張って更新していくので・・・orz
ごめんなさい・・・

## 繰り返し（前書き）

自分でもよく分からない方向に向かっている
さきほどの中途半端なやつの途中です

## 繰り返し

「具合悪いの？じゃあ帰ろうか」

礼奈はゆっくりと立ち上がった
そして悠斗の手を引いて歩き出した
そのときヒュっとものすごいスピードで1人保証所が駆け抜けた
耳元にはヘッドフォン、涙目の少女は全速力で駆け抜ける

「あの子どうしたんだろう？まいっか。悠斗歩ける？」

「あぁ。大丈夫。なんかごめんな」

全然いいよと笑顔を作った礼奈は悠斗の歩幅に合わせて歩いた
2人は公園を出て道に抜けた
公園のすぐ目の前にビルがある
そういえばここのビル今工事中だったよな
悠斗は少し周りを見渡した。なにか変なのだ。
周りの人はみんな上を見上げ口をあけているのだ
みんなビルの工事を見ているのか？
悠斗も上を見上げたと同時に、

「ごめん。悠斗」

「え？」

礼奈が突然謝って落下してきた鉄柱に自分から突き刺さりにいったのだ

「きゃあああああああああああ！！」

「え！！？なんで、礼奈？？！自分から？？！」

言葉にならないものが悲鳴となってのどの奥からこみ上げてくる。
劈くｈ名と風鈴の音が木々の隙間で空廻り

「はぁっ・・・はぁっ・・・これもまた・・・夢なんだよなっ？？！」

「あーあ・・・まただね」

横にはあの時いたもう１人の自分

「あ、言っておくけど夢じゃないぞ」

少年はわざとらしく指をさして悠斗を嘲笑う
ふと見た礼奈の横顔はなんとなく笑っているような気がした
口元は「ざまぁみろよ」って言っているような・・・
あぁもう視界が暗くなる

## 繰り返し（後書き）

今回は短い！！！

## ループ（前書き）

毎回サブタイトルを決めるのにけっこう時間がかかる・・・

## ループ

「うわあああああああああ！！！」

ガバッと飛び起きた悠とはものすごく汗に濡れていた

携帯を慌ててひらいて日付を確認する

８月１４日の午前１２時過ぎ。昼のニュースが始まっていた

「８月１４日、お昼のニュースをお伝えいたします」

衝動的に悠斗は家を飛び出した

「嘘だ・・・嘘だ！！」

狂ったように鳴く蝉に突き刺すような日差し

これを夢でも体験したんだ

全部夢なんだよ！！

公園まで悠斗は全速力で駆けぬけた

「あっ悠斗！」

のんきに手を振る礼奈の腕をとり、思いっきり引っ張った

「行くよ！」

「えっ？！どこに？！」

わけもわからず走る礼奈と歩道橋の階段を駆け上がる

もと来た道をたどっているのだ

「礼奈！はやく！」

「えっ？うん！」

ハッと気付くと隣にはいつも出てくるもう1人の自分
薄く笑っている少年の口元は「また繰り返す？」と言っていた
どうしてお前がいるんだよ??！
悠斗の意識枯れいなから離れたとき礼奈の世界が昇天した
急ぎすぎて階段を踏み外してしまったのだ

「礼奈ぁぁ！！！」

悠斗の叫び声も空しく礼奈は階段から落下していく
ガンッという鈍い音とともに真っ赤な血が吹き出る

「ねぇ、あと何回あの子を殺すつもり？」

もう1人の自分が問い掛けてくる
コイツは一体難なんだよ??！

「お前・・・誰だよ？」

「俺はお前だよ」

そう言って少年は笑った

「お前は自覚してないだろうけど、あの子はもう何千回と死んでるよ？」

は・・・？
意味がわかんねぇ
「いつも言ってるだろ。嘘じゃないぞ」
少年は自分の後ろを指差した
いつのまにか真っ暗な空間に2人きりで、さらに血塗られた時計や
割られた時計が何千個もある
もしこいつが言っていることが嘘じゃなくて本当だとしたら
この時計の数は礼奈が死んだ回数？
俺がループした回数のこと？
じゃあ礼奈はどうなんだよ？？！
「自分の心配しなよ」
少年が呆れ顔で言った。
あ、そろそろ時間だ。じゃあまたね。
と言い残して、少年は深い闇に溶けていった

そうだ、元々気付いてたじゃないか。
繰り返して何十年。もうこうするしかないんじゃないか？
こんなよくある話なら、結末はきっとひとつだけ・・・
俺はいけないけど礼奈は繰り返した夏の日の向こうにいけるだろう

## ループ（後書き）

中途半端だけどきります。。。

## 覚悟（前書き）

あぁあぁぁぁ・・・私の中ではそろそろこの話は終わりになるつもりｗｗ

## 覚悟

ハッと気がついたら底はもう公園だった。
なぜかブランコの上にいる
礼奈は猫を抱いていて、のどが渇いたといって立ち上がろうとしていた

「悠斗ージュースかって」

礼奈が子供っぽく笑った

「仕方ねぇなぁ」

悠斗も笑って立ち上がる

「一緒に行くよ」

礼奈が猫を抱いたまま悠斗を追いかけた
あぁ、この光景は何回繰り返したのだろうか？

「あっ」

猫が礼奈の腕から飛び降りた。道路に向かって走っている。
よく見とけよ、もう1人の自分。どうせそこにいるんだろ？
礼奈が道路に足を踏み込んだと同時に

「礼奈。ごめん」

「えっ？」

バット押しのけて道路に飛び込んだ。瞬間トラックにぶち当たる
礼奈との想い出が悠斗の身体を駆け巡った
走馬灯ってやつ？
悠斗は笑った。苦痛に顔をゆがませることも泣く
飛び散る血飛沫の色と礼奈の瞳と・・・
軋む身体にいろんな想いが乱反射する
文句ありげ？いや。驚いているもう一人の自分に向かって

「ざまぁみろよ」

と悠斗は言った。
喉はつぶれているのに、はっきりと声にすることが出来た
・・・後悔はしていない・・・
これでよかったんだよな？
ふと礼奈を見た。その瞬間信じがたい光景が目に浮かんだのだ
泣き叫ぶ礼奈のとなりにいたのは、冷たい目で俺を見つめてくるもう1人の礼奈
実によく在る夏の日のこと
そんな何かがここで終わった

パリンとひとつの時計が砕け散った。
その時計を割ったのは、もう1人の自分

8月14日の朝。少女は泣きながら悠斗と呟いた
「また、だめだったよ」
白猫を抱きしめる腕に力をこめた

「ふぅ・・・成功だ」

白衣の科学者はモニターの前で不気味に微笑んだ
そのモニターに移っていたのは、悠斗と礼奈だった
「次だ。もう不必要だから、すべて壊すぞ」
別のモニターにはヘッドフォンをしている少女が映っていた

## 覚悟（後書き）

おわったあああああああああああああああああああああああああああああ

ハイ。次のも書いていきます

すべて自己解釈ですのであしからず・・・

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6829z/

---

カゲロウデイズ　小説にしてみた

2011年12月26日01時12分発行